

(仮称) 久留米市障害者差別禁止条例の制定に向けた
障害者団体等意見交換会結果概要

1. 実施回数

○計 6 回

	実施日	対象団体数
第 1 回	令和 3 年 1 0 月 5 日 (火)	4 団体
第 2 回	令和 3 年 1 0 月 1 2 日 (火)	5 団体
第 3 回	令和 3 年 1 1 月 9 日 (火)	5 団体
第 4 回	令和 3 年 1 1 月 1 6 日 (火)	5 団体
第 5 回	令和 3 年 1 2 月 7 日 (火)	6 団体
第 6 回	令和 3 年 1 2 月 1 4 日 (火)	6 団体

2. 参加団体

○ 3 1 団体 (別紙 1)

3. 意見交換会内容

(1) 障害者団体等が事前に作成した様式 1 及び様式 2 の発表

- ・ 様式 1 : 各分野における具体的な差別事例
- ・ 様式 2 : 差別と言えない原因、相談窓口、差別のない地域社会への取組み等

(2) 意見交換

- ・ 障害者団体等と条例検討ワーキンググループ委員による意見交換 (別紙 2)

【添付資料】

○意見交換会参加団体一覧 . . . 別紙 1

○意見交換での主な意見 (項目別) . . . 別紙 2

障害者団体等意見交換会参加団体一覧

No	団体名	団体種別	団体構成
1	NPO 法人 久留米市手をつなぐ育成会	知的	当事者
2	久留米市精神障害者地域家族会	精神	当事者
3	公益社団法人 日本てんかん協会福岡支部	てんかん	当事者
4	NPO 法人 福岡・翼の会	高次脳機能	当事者
5	エンジョイポリオの会	ポリオ	当事者
6	久留米市身体障害者福祉協会	身体	当事者
7	久留米市視力障害者協会	視覚	当事者
8	心眼ハートあいず	視覚	当事者
9	NPO 法人 くるめ出逢いの会	精神	当事者
10	NPO 法人 自立生活センター久留米		当事者・支援者
11	NPO 法人 たけのこ		当事者・支援者
12	NPO 法人 むげん企画		当事者・支援者
13	地域活動支援センターあすなろ		当事者・支援者
14	NPO 法人 福祉会すまいる		当事者・支援者
15	久留米市ろうあ協会	聴覚	当事者
16	久留米市難聴者・中途失聴者協会	聴覚	当事者
17	久留米市自閉症児・者親の会	自閉	当事者
18	Yorozuya (ヨロズヤ)	地域づくり	当事者
19	佐賀・筑後発達支援親の会「夢気球」	発達障害	当事者
20	NPO 法人 久障支援運営委員会		当事者・支援者
21	NPO 法人 にじいろCAP	地域づくり	当事者
22	gocochi-Next (ゴコチネクスト)	自閉・発達	当事者
23	ノーマライゼーション研究会	地域づくり	当事者
24	NPO 法人 Sネットくるめ	就労・生活	支援者
25	インクルーシブネットワーク福岡		当事者・支援者
26	聴覚障害教育支援 NPO 法人 言葉の森くるめ	聴覚	支援者
27	久留米手話の会	聴覚	支援者
28	パソコン要約筆記の会「PCくるめ」	聴覚	支援者
29	支援をつなぐ連携サポートくるめりい		当事者・支援者
30	NPO 法人 フレンドスクール		当事者・支援者
31	筑後川花火大会をみんなで見る会	地域づくり	当事者

1. 障害に対する理解について

発言者	内容	実施回
育成会	・ 見た目では障害と分からない発達障害者は、理解してもらえない。	第1回
育成会	・ 警察官において、障害者理解が足りない。	第1回
てんかん協会	・ 警察官や裁判官において、障害に対する無理解や知識のなさを感じる。	第1回
WG委員	・ 社会全体において、障害に対する認識不足が深刻である。	第1回
WG委員	・ 障害の理解とはどこまで理解することなのか。医学的なことまで学ぶ必要はない。理解を求めるがあまり固定観念に囚われてしまっている。障害を理解するためには、障害者と付き合い合わないといけない。	第1回
WG委員	・ 人との付き合いは、付き合って心地良い人と付き合っていく。障害者との付き合い方については、障害名ではなくその人にとって心地良いことは何かを考えること。	第1回
てんかん協会	・ 障害の理解というが、例えばてんかんには様々な種類がありその種類を理解してほしいということではない。てんかんの発作が起きたときの対応の仕方、例えば救急車は呼ばず危険がないように対応するだけでよいこと等を知って欲しい。	第1回
てんかん協会	・ 障害の理解とは、障害者に対する配慮を常識として知って欲しいということ。	第1回
自立生活センター久留米	・ 具体的な名前が浮かぶような関係づくりを行わないと障害者に対する理解は進まない。漫然と視力障害やダウン症のことを言われても想像できない。視力障害の誰々さん等という関係があって想像できる。	第3回
自立生活センター久留米	・ 障害者が地域で見かけなくなり、障害を持った人は大変だと漠然に思うが具体的な知り合いはいない。これが大きな障壁になっていると思う。具体的な名前が挙がる知り合いがいなければ、その人の苦労や喜びなどは分からない。そのためには一緒に過ごす空間が必要だ。	第3回
たけのこ	・ 障害者と対等の立場や尊敬し合う関係づくりには知り合う場が必要だと思う。	第3回
あすなる	・ 差別をなくすためには、ひとりひとりに触れあっていくことが重要だと思う。	第3回
WG委員	・ これまで障害当事者と地域の方等が自然な形で話し合う機会はあまりなかったのではないかと。話し合う機会を社会が意図的に設けることで、障害者を知ってもらえ、理解が進むと思う。	第3回
WG委員	・ 昔のように障害の有無にかかわらず、地域の中で一緒に生活することで、障害がどのようなものか実体験を持って学べる。このことが大事と思う。	第3回

2. 合理的配慮について

発言者	内容	実施回
WG委員	・ 社会において、合理的配慮の考えは浸透している。社会参加するためには、障害者本人もどのような配慮があれば社会参加できるのかということを知っておく必要がある。さらに、その配慮を障害者本人が言うべきである。	第1回
WG委員	・ 障害が多様化しているので、今まで以上に障害者に対し配慮をしてほしい。	第1回
心眼ハートあいず	・ 障害者によって情報を得るためのツールは違うので、何を必要としているのか当事者に聞いてほしい。	第2回
心眼ハートあいず	・ 障害当事者も自分が出来ること、出来ないことを自分自身で理解することが必要。さらに、そのことを話せる場や発信する場が欲しい。	第2回
ろうあ協会	・ 美術館や映画館などの施設において、災害などの非常時に私たちは耳が聞こえないので、何か分かるような方法や設備を考えてほしい。	第4回
自閉症児者親の会	・ 小中学校において、聴覚過敏である児童に対しイヤーマフの着用は特別支援学級内と云われた。視覚過敏の児童に対しサングラスの着用が認められなかった。つまり障害に合わせた支援グッズを使用できない状況がある。	第4回
WG委員	・ 合理的配慮を促すためには障害者と一緒にいるしかない。一緒にいれば一緒にいるため工夫をする。いない人のために工夫はしない。	第5回

3. 教育について

発言者	内容	実施回
WG委員	・ 障害者に限らず、日本の教育自体が自己主張することに慣れていないと思う。障害者の場合は受け身で生活しているので、さらに自己主張することに慣れていないと思う。	第1回
出逢いの会	・ 当事者の主体性を取り戻すという意味で、当事者において権利を知らない人に対する権利教育が必要である。	第2回

出逢いの会	・ 子どもの頃に、人権や人の尊厳に関することを学べる教育が欲しかった。	第2回
出逢いの会	・ 障害になったから権利教育を受けるのではなく、すべての人に自分の権利や主体性を学ぶ機会が保障されるべきである。	第2回
出逢いの会	・ 障害のある子を持つ家族も学ぶ機会が奪われている。自立のためと思った言葉や関わりが、逆に本人の自立を阻害している。障害を持った子どもの主体性を尊重することはどんなことを学ぶ機会が少ない。このことは、家族の権利も脅かされている状況である。	第2回
すまいる	・ 今の小学校や中学校では不登校やいじめの問題など様々なことがあり、学校自体が大変だと思う。そのような中で、障害のある児童は地域の学校から離れているのではないかと感じている。	第3回
すまいる	・ 現在、障害を持った子どもの保護者たちには、一緒に助け合う仲間がいるのか心配している。	第3回
WG会長	・ 特別支援学校は増えている状況にあり、教育の現場で健常児と障害児は分断されている印象がある。さらに教員においても発達障害を含め、障害に対する知識がなさすぎると思う。	第3回
自立生活センター久留米	・ 流れとして普通学校に通う健常者の要件が厳しくなっていると思う。そのことが教育上の脱落者を多く輩出させていると思われる。個性を重視するのではなく、特定の人間像に絞り込んでいることで、なんらかの障害を持った人を排除している。その結果、社会は寛容さを失い、ますます殺伐とした社会になると思う。	第3回
自立生活センター久留米	・ 教育の格差が所得の格差と言われるが、所得を得るための教育なのか。社会を良くするための教育ということを経営分野で問い直す必要がある。	第3回
自立生活センター久留米	・ 教育を受ける大きな目的は、社会を良くするため、平等の世の中を作っていくためであると思う。それを教育の基本に置かなければ、世の中は良くなると思う。	第3回
WG委員	・ 人権教育について、印象に残らない、学びの実感がないという問題をどうするのか。学生と一緒に振り返ってより良いものにしていくことが大切ではないかと思う。教育を行う側と教育を受けた側と一緒に作り上げることが大切であると思う。	第3回
WG委員	・ 私たちの時代は一斉教育を受けてきた。しかし、平成元年ぐらいに指導方針が変わった。それはアクティブラーニングという国際化に向けた授業で、グループでトークを行うように変わっていった。そこでは、障害を持つ人たちは、自分の意見を言いたくても言えないという状況が発生し、ますます分断教育が進んでしまったのではないかと強く感じる。文部科学省の学習指導要領が変わらないと難しいと思う。	第3回
WG委員	・ 校則が厳しすぎ、それは個性をなくす教育である。これではますます障害者は入りにくくなっていく。管理する側が管理しやすいようにしてきている。結果、子どもから寛容さ、おおらかさがなくなっていく。	第4回
WG委員	・ 子どもたちは没個性化し、枠組みからはみ出してしまう子は自己否定するようになる。枠組みに合せられない自分が悪いと思ってしまう。社会で受け入れることができなかった人を受け入れることが、そういう人々を救うことにつながると思う。	第4回
orozuya	・ 小学校だけではなく中学校でも、障害に対する理解促進のための授業があってもいいと思う。	第4回
佐賀筑後発達支援親の会	・ 放課後デイや児童発達など多数の施設ができたため、発達障害の子どもはそこへ通う。結果、地域に障害を持つ子供たちがいない状況になっていると思う。個々に合わせた療育は必要と思うが、小さいときに障害者と関わる、いろいろな方と関わるという経験が、子どもたちに障害ある方を受け入れやすくなるのではないかと思う。	第4回
自閉症児者親の会	・ 小学校や中学校の道徳の教科書に、頑張っている障害者、例えばパラリンピックなどで頑張った方が取り上げられている。このことが普通の公立学校で取り上げられると、より生きにくい社会になっていくと思う。	第4回
WG委員	・ 地域の小学校に通っていた障害児が中学校に上がる際、障害児は地域の中学に行きたいと思っていたが、教育委員会は特別支援学校を勧めるという現状を知って欲しい。	第4回
WG委員	・ 自閉症児者親の会の話など各団体の話を聞き、色々と共感できると思った。しかし、障害者の側に改善を求めていることについては以前と変わっていないと感じた。本来、リハビリをするのは、社会ではないのかと思う。	第4回
WG委員	・ 私は地域で育ってきたがある時から施設に入れられた。つまり地域から離されてきた。地域から障害者がいなくなり、地域には普通に動ける人ばかりということが言える。このことがずっと続いている。障害者を持つことが恥ずかしい、世間に晒したくないという感情がどこかにあると思う。しかし、この考えを直していく必要がある。	第4回
WG委員	・ いろいろな方がいるから面白いというような世の中になってほしいとあらためて思う。	第4回
WG委員	・ 障害者に対する否定的な考えは、私が生まれたころと何ら変わっていない。それは、ほとんどの人は自分とは関係ないことと思い放置し、さらに、障害当事者も世の中を変えてこなかったと言える。差別は、親族や兄弟など自分の身近に起こって初めて気づく。どういう状態で生まれても保障していくことを条例に反映する必要があり、それが条例の意義だと思う。	第4回

難聴者中途失聴者協会	・聞こえないのは聞こえない方が悪い。能力がないとみなされる。補聴器をつけているだけで、普通になんでも聞こえていると思われがちだが、実際にはあまり聞こえていない。このことを分かってくれる人がおらず、聞くことにおいては、聞こえない方が悪い、聞こえないならばいらないと捉われがちである。	第4回
WG委員	・学校教育の前の段階から一緒に学び合うことが大切だと思う。また、援助者の方や制度を考える人とそこを利用する人が、仕組みを一緒に考えることができればいいと思う。	第4回
WG委員	・親自身も、出会う必要があると思う。いろいろな方の話を聞く機会があるといいと思う。そのような機会がないと進まないと思う。	第4回
自閉症児者親の会	・義務教育期間が過ぎ、当事者が不登校やひきこもりなどの状態になると、福祉などの必要な情報が入りにくい。	第4回
にじいろCAP	・この意見交換の場に中学生や高校生が1人もいないということはどういうことか。教育の問題だと思う。また、学校で障害者差別を教えていると感じている。大人が差別を学校で教えているのではないかとさえ感じている。それを解決するために、例えば、高校に障害者を持つ子供が入っていいのかということと共に学ぶ子供たちが決めてもいいのではないかと。	第5回
WG委員	・分けることは管理がしやすくなる。学校は管理を安易しやすいように分けている。そのような中で、自分自身の価値を見失う子どもが増えてきている。同じような子どもの中で劣位を感じ自分自身を蔑んでしまう。やはり色々な能力の子どもたちが集まることによって、他人にはできないが自分はできること等が分かる。様々な経験を得る必要があると思う。	第5回
WG委員	・学校を見ているとヒエラルキーがあり、それは先生より生徒が下ということである。そのような中で、自分自身が価値ある人間としての人権を守るという教育がなされるのかということと甚だ疑問。自らの人権意識が育まれない中で、他人に対して人権意識を育むようにと言っても不可能なことだと思う。	第5回
インクルーシブネットワーク福岡	・私は中学校の教員でしたが、私たちが100回言うより友達の姿を見ることのほうが良く効く。障害を持った子が1人いて、その子が何か価値みたいなものを広げてくれたと思う。やはり、子供たちは子供たちが変えるんだ、だから、社会の中に当たり前前に障害を持っている人も一緒にいれば、本当に変わっていくのではないかと。	第5回
インクルーシブネットワーク福岡	・一緒に過ごす。小さい頃から地域の保育園、幼稚園あるいは小学校中学校高校まで、共に過ごせば色々な価値が子供たちに認められるようになるのではないかと感じている。	第5回
gocochi-Next	・教育の問題はとても大きいと思う。自分の子どもが保育園から小学校中学校で地域の友達と一緒に過ごせたことは、障害の理解にも繋がっていると思う。	第5回
gocochi-Next	・共に過ごすことの大事さ。最近は人と合わせられない子ども、集団行動が難しい子どもは支援クラスに進められることも多い。このことはどうにかならないかと思う。	第5回
gocochi-Next	・通常学級の先生たちにボーダーの子たちへの特性の理解があれば、少し配慮してもらえ、そのことで一緒に過ごせたりすることもあると思う。	第5回
Sネットくるめ	・条例には、学校・福祉・行政の垣根をなくした形の支援体制、協力体制ができるようになるものであってほしい。	第5回
Sネットくるめ	・地域の高校に入りたい障害児もいる。しかし高校は単位制と履修が重要なので、みんなと平等にやっていくために単位と履修をどう補っていくのか考えていく必要がある。	第5回
WG委員	・生徒がお互いのことをもっと人として学び合う機会を、いろいろな見方で取り入れ、教育に取り入れていいのではないかと。	第5回
WG委員	・相手がなぜそう思うのか、そのような気持ちが生まれてくるのか等、相手の理解を深めるような教育の機会を増やしていいのではないかと。既に行っているのであれば周知する必要がある。	第5回
WG委員	・放課後デイの問題で、障害児と混ざり合う機会として学童保育を充実させることが必要だと思う。スペースを広げる、職員を増やす、職員の待遇を良くするなどして、障害を持った子どもを受け入れていく必要があると思う。そのような中で共に学び合っていけるようになる。	第5回
WG委員	・手話や要約筆記は、かわいそうだと思う人を助けるための作業ではない。そのことが分かるように、少なくとも学校教育で人権についてきっちり教え込む必要があると思う。共に暮らすためにどのように工夫するのかということ、改めて考え直さなければいけないと思う。	第6回
WG委員	・フレンドスクールの特別支援学校での話から、何にも感じない場所にずっといると、本当に何も感じないまま学校生活が過ぎてしまう。大変だが地域の中で生きていくと、差別が分かると思う。差別されたこととしたことと分かり、つまり差別の感覚がついてくるのではないかと。	第6回

4. 相談窓口について

発言者	内容	実施回
WG委員	・様々なところにあったほうがいいのか、1ヶ所だけにまとめた方がいいのかということを感じた。	第3回

自立生活センター久留米	・ 最寄りのところに多数あったほうがいいと思う。しかし、相談を受ける人は、色々な相談にのれる、人権感覚に鋭くなければならない。	第3回
たけのこ	・ 専門性がある人を多く輩出しなければならないと思う。多く輩出しないと窓口もたくさん出来ないと思う。	第3回
むげん企画	・ 様々な障害の方と出会っている中で感性が身につく、必然的に合理的配慮も分かってくると思う。そのような方々に窓口や相談を受ける方になってもらいたい。	第3回
あすなる	・ 1ヶ所になるとそこに行くことが大変な方もいるので、身近なところに相談の場所があればいいと思う。例えば、気軽におしゃべりできるような場所など。ただし個人情報やプライバシーなどを守るということになると、相談の種類によって場所が色々あった方がいいと思う。	第3回
すまいる	・ 校区に相談の窓口が設けられたらいいと思う。しかし、相談を受ける人によると思うので、人を育てるということが大変になってくると思う。	第3回
gocochi-Next	・ いろいろな親と話し、合理的配慮は何かということが全然分かっていないというのが実情。差別が何なのか、合理的配慮は具体的にどういうことなのか分からない。よって、相談窓口というものがとても重要と思う。	第5回
gocochi-Next	・ 合理的配慮の不提供の基準を正しく持てるところが久留米にあることはとても大事。そういう意味では、地域協議会の役割は大切と思う。	第5回
gocochi-Next	・ 利用者と事業所の中間にいる基幹相談支援センターには、きちっと本人に寄り添い、最初のスクリーニングをしっかりとやっていき、合理的配慮や差別の可能性について確認できる体制をとっていただくことが大事。	第5回
WG委員	・ 相談場所がたくさんあるよりも人が大事だという話があり、確かにそうだと思います。最初のスクリーニングをしっかりとやっていき、合理的配慮や差別の可能性について確認できる体制をとっていただくことが大事。	第5回
WG委員	・ くるめりいさんの話で、適切な人が相談窓口にいることが大事なことで、相談を受ける人も親身になって相談を受ける人であることという発言から、私は窓口当事者の方がいることによって、相談する人も相談を受ける場も良い効果を得るのではないかなと思う。	第6回

5. 社会について

発言者	内容	実施回
WG委員	・ 共生社会をつくるために、学校教育や労働など様々な所で、障害に対して考える機会が広まって欲しい。	第1回
育成会	・ 最近では、幼い障害児を持つ親に地域の中で共に育つ必要性を話しても分かってもらえない。障害児を持つ親は、放課後等デイサービスや特別支援学級など特別なところを選ばれる。	第1回
WG委員	・ 障害児を持つ親が特別な場所を選ぶ要因は様々あると思う。家に祖父母がいないこと、学校で大きい子と小さい子と一緒に遊ぶ機会がなくなっていることなどが考えられる。小さい子は運動能力や判断能力が大きい子と比べ劣っているので、一緒に遊ぶには様々な工夫をする。このことは障害者と接するときの力になる。しかし、今はその機会がない。	第1回
WG委員	・ 学校や地域で一緒に学ぶことはバラ色ばかりではない。イジメなどもあるかもしれない。それを避けるため親は子どもに対し、特別な場所を求めてしまう。しかし、共に生きる社会を目指すのであればどこかで歯止めをかけないといけない。	第1回
WG委員	・ 共に生きる社会を目指すためには、一緒にいないといけない。一緒にいない人のことは誰も考えない。	第1回
出逢いの会	・ 差別を受けている人は差別に気づいていないこともあるかもしれないが、大切なことは差別かどうかを決めるのではなく、差別が起こらない又は起きにくい社会にすることが重要だと思う。	第2回
出逢いの会	・ 自分が差別を受けた実感や主観で語る差別、体験した差別も大事だと思う。しかし、社会の仕組みがどのようにして差別的に作られているのか、その結果、差別に気づかない構造が作られているのかということを確認する必要がある。	第2回
自立生活センター久留米	・ どのような状態でも生活できる、自分の可能性を成就できる社会を目指さないと、ますます排除される人間が多くなると思う。	第3回
自立生活センター久留米	・ 障害者を排除することは何かと比べて劣勢な人を排除することにつながる。一番弱い人をどのように社会で受け入れていくのか、これが社会にとっては必要だと思う。そのことを教育で行っていかなければならないと思う。	第3回
WG委員	・ お互いに話をしないと差別の解消はないので、出会う場を社会からも設ける必要があってもいいのではないかなと思う。	第3回
WG委員	・ 最近感じることは、子どもや障害者に対し、対象者に対するリスペクトが足りないと思う。子どもを子ども扱いし尊敬の念がない。障害者に対してもそうだと思う。	第5回
WG委員	・ 障害者が混じることで自分たちの人権を見つめ直す、自らの差別性とも向き合うということができると思う。	第5回

WG委員	・ 断固として差別を許さないことは、自分の立ち振る舞いを見つめ直し、対象を尊敬のまなざしで見えていたかということを考えることである。子ども、障害者、お年寄りに対してもリスペクトが足りない。それが一番の問題であると思う。	第5回
ノーマライゼーション研究会	・ 病気や障害を持っている人にそっぽを向く人が非常に多い。そっぽを向かずに対応してほしい。顔やルックスで判断せず、中身でしっかり判断してくれる人。そのような人がいたらいいと思う。	第5回
インクルーシブネットワーク福岡	・ たくさんの障害者が町に出て行くことで、車椅子の使い方やそのような場面を見る機会、あるいは接する機会が生まれ、人の対応も変えていくことに繋がると感じる。よって、障害がある方など多様性を持った人たちが一緒に過ごせるような場にするべきと思う。	第5回
久障支援運営委員会	・ 本人にとっての豊かな環境のためにオーダーメイドの療育は必要と思う。一方で、地域との繋がりとしては逆になるのではないかという危惧も抱いている。やはり、この両輪がとても大事と思う。本人の心地よいことを地域の方々に知ってもらうためにも、まず、障害者も地域に出る必要があり、地域も障害のある方に対し受入れる土壌を作らないといけないと思う。	第5回
インクルーシブネットワーク福岡	・ 障害のある子を持つ母親への啓発は、久留米市の条例ができたとしても、一部の人たちが知っているのではなく、皆さんに啓発しさらに浸透して稼働するという流れまでしっかり作っていただきたい。	第5回
WG委員	・ 障害のことを知らない人たちから偏見やステグマが生まれる、人権が奪われてしまうことが起こるのだろうと思う。	第5回
WG委員	・ 現に健常者が使っている所に、どのようにして障害者が入っていくのかということが求められている。わざわざ障害者のために施設を作るのではなく、健常者には様々な施設はあるので、そのような場所に障害者を受け入れられる社会にしなければならない。	第5回
WG委員	・ 手話通訳者や要約筆記者の養成が難しいということで、全体的に言えることは人権の問題だということ。やはりリスペクトが足りない。手話を普及することについてもボランティア頼みになる。	第6回
WG委員	・ 人々は誰に対して敬意を払うかと言えば、社会的に地位の高い人に敬意を払う。そういう中で障害者は隅に追いやられた。かわいそうな存在であっても決して敬意を払う存在ではないということ。このことが一番問題である。	第6回
WG委員	・ 手話を普及するためにはどうしたらいいのか。共に仲良く過ごすというだけでなく、敬意を払うためにどのようにすべきかを考える必要がある。	第6回
WG委員	・ 社会福祉士、介護福祉士、精神保健福祉士など様々な専門職が生まれ出されてきているが、手話を必須項目にしてきたか。そのようなことを提起しなければならないと思う。	第6回
WG委員	・ 障害者とどのように付き合っていくのか、それを職業にしていくのであれば気合いを入れて学んでほしい。寝食を共にしてみるという覚悟さえも見当たらない。そういうことでは差別は解消されないと思う。	第6回
WG委員	・ 関わる人たちの人権意識について、知らない人権意識も磨かれない。お互いに知って学んでいくことで出来ていくものと思うので、そのような機会を私たちも持たないといけない。支援者だけでなく、地域の方も機会を持つ必要がある。	第6回
WG委員	・ 障害者が施設で過ごす。そのことは、いろいろな体験を奪われていることだと思う。トラブルや喧嘩をすることもあると思う。色々な人がおおらかに見守るという態度が必要と思う。どちらが悪いとか言うのではなく、そのような柔軟さが必要であり、障害者がいないということは、その柔軟さを社会が失うのではないかと思う。	第6回
WG会長	・ 障害があってもなくても、地域の中で共に生きていくという文化を作らないと、実は健康も守れない、寿命も守れないということはショウジョウバエの実験で明らかになっている。よって、ぜひそのような久留米市を作っていきたいと思う。	第6回
WG委員	・ 言葉の森くめの方が言っていたが、聞こえることが正常みたいな表現があった。まさに、それは障害全般に言えることだと思う。何が健常なのかということを考える必要があると思う。	第6回

6. 第三者機関について

発言者	内容	実施回
出逢いの会	・ 例えば、精神科病院入院時の場合、本人と病院を仲介する第三者機関の設置を条例で定めてほしい。第三者機関では、本人を良く知る関係者と病院との仲介機能、病院に対し拘束理由や治療内容の説明の開示機能、本人の権利擁護の機能等を備える。	第2回
出逢いの会	・ 差別は、知らない又は人権侵害を経験したことがないことから起こると思う。よって、差別を受けた際に同じような体験をした方々と繋がることができると横の繋がりが、第三者機関という形について大賛成である。	第2回

7. 自己主張について

発言者	内容	実施回
自立生活センター久留米	・今は障害者に限らず自己主張することに慣れていない。自己主張する人は嫌われる。弱いと思われている人が自己主張すると頭にくる人が多い。お金を稼がない、生産性のない方は世の中で自己主張するなという風潮がある。誰かの庇護にある人は自己主張するなと小さいころから教え込まれていると思う。このことを改善していかないと世の中は良くなれないと思う。	第3回
自立生活センター久留米	・誰かが誰かを支えるということは様々な場面によって生じている。お互い様であって自己主張を制限することではないと思う。	第3回

8. 結婚について

発言者	内容	実施回
WG委員	・障害者の家族が反対する。家族が反対する中で結婚することはかなりの労力がある。さきほどyorozuyaさんが言っていたが、結婚式や葬式に呼ばないことは、まさに家族が障害者を受け入れていないことを表していると言える。自分の家族に障害者をいることを許さない、障害者同士の結婚を許さない場合がとても多い。	第4回
yorozuya	・生活基盤があれば結婚はできると思う。昔に比べれば結婚はオープンになったとは思っている。	第4回

9. 人工内耳について

発言者	内容	実施回
ろうあ協会	・子どもが生まれ耳が聞こえないことを早期に発見した時、親は医者から人工内耳を勧められることが多い。親には聴覚障害の知識がないため、医者が勧める人工内耳の手術を選択する。親はずばらしい「ろう」の世界があるというものを知ってから、対応して欲しい。	第4回
ろうあ協会	・現在、「ろう」の世界と「人工内耳」の2つの選択肢を、親が決めて奪ってしまうという状況が非常に多い。	第4回
WG委員	・耳が聞こえないということで聾啞者は「ろう」の文化を持っている。子どもが自分で判断する前に、健常者と同じように聞こえるかどうか分からない人工内耳を入れることを決められてしまうことはいかなるものか。	第4回
WG委員	・医者も手話の世界があるということを知った上で、親には手話の世界と人工内耳を両方紹介する、それが大事なのではないかなと思う。	第4回

10. 手話通訳者、要約筆記者の養成について

発言者	内容	実施回
ことばの森くるめ	・市では養成講座を進めているが、講座終了後の定着は進んでいないと思う。今後、手話通訳者の養成について何か予定や計画がもしあれば教えてほしい。	第6回
手話の会	・国できちんとした制度を作っていないと手話通訳者の養成は非常に難しいと思う。国が手話を言語として認める。強い又は行き過ぎではないかと思われる、例えばADAみたいなものが出来ないと、運動だけでは進まないと感じる。	第6回
要約筆記の会PCくるめ	・要約筆記の場合は、求められる技術はとても高いにもかかわらず、仕事としてはやっていけない。片手間にやるしかない状況。自分たちのパソコンはほぼ自前で5年と持たない。肩や腕が痛くなるような病気を抱える人も中にはいる。ボランティア活動をしたいと思いついた人でも、辞めていく人が多い。	第6回
要約筆記の会PCくるめ	・要約筆記者養成講座の中では「専門的な技術を持った福祉の従事者です」、「気持ちだけで行っているボランティアではありません、お仕事です」という説明を受講生の方にはしている。一方でパソコンは自前など身を切るという形、手出しを強いているということで私たちも複雑な思いがある。	第6回
WG委員	・手話の会の話から、通訳者の方は差別を感じる事が大事であること。そして、どの障害にもいえる事だと思うが障害の人権教育や学習の場が少ないと思うので、今後増えていくことが望ましいと思う。	第6回
WG委員	・身分保障が大事。仕事としてきちんと体制を整えてないと、いくら養成しても人が増えていかないということを改めて思う。この身分保障を条例の中でしっかりとやるべき。	第6回
WG委員	・手話言語について、言語が十分でないと思えない。十分に思考できるだけの語学力を取得させ、さらに保障することが大事だと思う。手話が特別な物ではなく思考するためのひとつであるということが言葉の森くるめの話から再確認できたと思う。	第6回

1 1. 災害について

発言者	内容	実施回
WG委員	・ 皆さんの意見を聞いて、地域で関わっていかないと災害が起きたときに困るということを改めて実感した。	第6回

1 2. 療育について

発言者	内容	実施回
自閉症児者親の会	・ 幼児期から継続して発達障害の場合、療育を受けることがとても重要。しかし、久留米市には継続して利用できる療育施設、特に学童期に利用できる療育施設がない。	第4回

1 3. 親亡き後について

発言者	内容	実施回
自閉症児者親の会	・ 親亡き後、当事者はどのように生きて暮らしていくのか。当事者や親にとって最大の懸念であり不安であるが、久留米市からの情報がとても少ない。	第4回